

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	社会集団としての教派神道の展開に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	藤井麻央
Author(English)	Mao Fujii
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12299号, 授与年月日:2022年12月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:弓山 達也,上田 紀行,中島 岳志,中野 民夫,福留 真紀
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12299号, Conferred date:2022/12/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第		号	学位申請者氏名		藤井麻央	
論文審査 審査員		氏 名	職 名		氏 名	職 名	
	主査	弓山達也	教授	審査員	福留真紀	准教授	
	審査員	上田紀行	教授				
		中島岳志	教授				
		中野民夫	教授				

論文審査の要旨（2000 字程度）

本論文は「社会集団としての教派神道の展開に関する研究」と題し、幕末維新期に生じた宗教が教派神道という宗教団体として成立し、展開する過程に注目して分析を行っている。幕末維新期に生じた宗教は、近代日本の宗教の特徴を示す事例として、発生段階の思想を中心に解明が進められてきた。これに対して本論文は、団体的側面に着目して、黒住教や金光教の宗教団体としての生成と維持・継続段階における変容を社会環境の中で捉えていくことで、近代日本の宗教団体の特徴を提示するところに、その特徴があり、全体として、次の序章・終章と、本編3部から成る。

序章では、論文の目的、研究の背景、問題の所在、先行研究、視点と方法、論文の構成について言及している。

第1部「明治期における黒住教と金光教」では、黒住教と金光教における教派神道としての宗教団体の生成を論じている。第1章「黒住教における「教団」という自己規定」では、黒住教の置かれた社会的立場を注視しながら、黒住教が神道や宗教をどのように捉えて自己規定していたのかを検証し、明治末期になり教祖に原拠を置く信徒の集団であることを自らの語りとして獲得したことを明らかにしている。第2章「金光教における教団自治の体现」では、金光教の教派神道体制への編入を宗教組織の形成過程として検証し、内務省と交渉の末に達成された一派独立により、近代の宗教団体のモデルと指摘し得る組織を備えたことを示している。以上の第1部を通じて、本論文は先行研究が及んでいない明治中後期を含めた、明治期全体の宗教政策・行政と教派神道となった宗教との関係の特徴を明確にしている。

第2部「社会の中の教派神道」では、教派神道の明治期の展開を社会環境の中で把握する視点をより深めながら、宗教団体の構成要素として重要な教育と教会について論じている。第3章「教派神道における教育」では、内務省から中学科相当の教師養成が要請される中で教師養成機関と中学校を備えた金光教を中心に検証しながら、教派神道と学校教育との関係を明らかにしている。第4章「教派神道における教会」では、神道の教会をめぐる政策・行政の動向を追いつつ、黒住教と金光教における教会制度の導入と、その過程で本部と地域との間で緊張関係が生じた事例を検証し、地域の信仰営為を結集しながら一元化した組織を実質化するのは容易でないことを明らかにしている。以上の第2部を通じて、本論文は宗教団体が救済の働きを核としながらも、世俗的要素の複雑な絡み合いの中で存立していることを

具体的に示している。

第3部「制度化過程の金光教」では、前章までの明治期の動向を踏まえつつ、戦後も含めた金光教の中長期的な展開を論じている。第5章「金光教の教会制度の展開」では、森岡清美の宗教組織論を手掛かりに、金光教の教会制度の遷移を検証し、教義が教会制度に対して規範的な力を有しながら両者が相互に作用する展開過程を詳述。第6章「金光教の布教論の展開」では、布教とその教義に注目して維持・継続段階における金光教を検証し、教祖の事跡に基づく布教論が形成され変容する宗教運動の制度化過程の展開を明らかにしている。以上の第3部を通じて、本論文は金光教では、第3章で明らかにした宗教団体内の教育体系の下で育った教団第二世代と呼ばれる群が担い手となり、宗教団体の運営と教義が連動しながら制度化過程が展開したことを示している。

終章では、各章で明らかになった知見から、教派神道の歴史的な性格として、教派という包括団体は教会と教師を管理する事務機能を期待された組織であるという共通の特徴を有すること、そして、そのような包括団体に対して宗教的な意味が付与されて、目的集団に価値転換する「意味の革新」の経過が存在したことを析出している。さらに、この革新の過程を捕捉することは、単位団体である「講・講社・教会」から「教派神道」や「神道系新宗教」に展開する宗教運動のダイナミズムの解明に貢献するものであることを指摘している。

以上要するに、本論文は、従来の教祖の思想に着目した教団発生に強い関心が注がれていたのに対して、教団のその後の維持・継続段階における変容を社会環境との相互作用から解明したところに大きな特徴がある。特に宗教団体の明治政府の宗教政策・行政との関わり、その運営と教義とともに連動しながら「講・講社・教会」から「教派神道」「神道系新宗教」への制度化をたどる過程のダイナミズムを描き出している。これらの知見は本論文の所期の目的を完遂のみならず、宗教運動（新宗教運動や教派神道など）に関わる宗教社会学に対して学的貢献があると認められ、よって、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判断する。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。